

# 骨面上の反戦詩

## A・クラノーフ（訳・村野 克明）

★以下、（ ）は著者、「」は訳者による。「」内の記述は主に隅谷三喜男著『片山潜』（東京大学出版会、一九六〇年刊）所収の「片山潜年譜」を参照した。

赤い月は誰のじや子ども達（一茶）  
野ざらしを心に風の沁む身かな（芭蕉）

これから記すことが奇妙な思い出であると  
は自覚しているが、起きてしまった事はどう仕  
様もない。もう十年以上も以前、モスクワ郊外  
で或る精神病院の見学ツアーがあった（そんな  
ツアーもあったのだ）。その際に、私はその病  
院の敷地内のキリスト教の聖堂に立ち寄った。  
丁度、あくせくとした修復作業の真っ最中だっ  
た。濛々と埃が立ち上り、天井からは不潔なポ  
リエチレン製のシートが垂れ下がり、床には建  
築用資材その他のゴミが一面に舞めき合  
っていた。聖堂内の隅々から現場労働者が掻き  
集めたものだ。ここはソビエト時代には再三、  
改築され、その都度その使命が変更となった。  
さて私は堆積するゴミの中に白い歪んだ薄  
板を目にした。奇妙な模様があった。手に取っ  
て持ち上げてみると、それは骨だった（牛の肩  
甲骨かもしれない。肉屋ならぬ我が身には知る

由もないが）。骨面には筆で書かれた日本語の  
漢字があった。一部は擦り切れており、一部は  
見慣れぬ文字である。全体の意味はすぐに把握  
することが叶わなかった。ただ、何かの詩句な  
のかも知れないと推測したばかりだ。この掘り



出し物の写真を撮って、現物は博物館の学芸員  
に渡し、写真の方を日本文学の専門家に見せる  
と、彼氏はこう請け合った。

「仰る通り、詩句ですよ。しかも、クラシック  
なものではなく所謂「新体詩」の類いで、反戦

的な内容だ。おそらく一九二〇年代から三〇年  
代にかけてのものでしょう」

骨面に書き込まれたこの詩句のあり得べき  
著者は誰なのか、その詮索にそれからの数年を  
費やした。現在、高いレベルの確率で言えるこ  
とは、著者が片山千代「ちよ」ではないか、と  
いうことだ。日本共産党の創立者「の一人」片山  
潜「せん」の次女である。

日本の共産主義者の未来の指導者がこの世  
に生れたのは一八五九「安政六」年のこと、東京  
から遠く離れた所「現在の岡山県」の農民の出身  
で、幼名は藪木菅太郎「やぶき・すがたろう」と  
言った。十九歳の時「一八七八年」、跡取りのい  
ない片山家の養子に出され、当時の仕来り通り、  
名前を変更した。こうして同時に徴兵を逃れた  
のだ。しばらくして「一八八二年」潜は上京し印  
刷所に就職したが、八年後には太平洋を渡る「正  
しくは上京から三年後の一八八四年の十一月に横浜を  
出航、翌十二月にサンフランシスコに到着」。

アメリカ合州国ではまずカレッジを卒業す  
る「一八九二年六月グリーンネル大学（現アイオワ大学）  
卒」。それから、神学の研究を始め、キリスト  
教徒になるほどの熱中ぶりを示した。最も権威  
あるイェール大学に入学し「一八九五年六月に同  
大学神学部卒」、突如として社会主義者に変貌す

る「潜在社会問題への関心を強めるのはグリーンネル大  
学時代」。

片山が日本に戻るのは一八九六「明治二十九」  
年のことで、その頃には、プロレタリアートの  
事業のための経験豊富な闘士となっていた。労  
働組合を作り、宣伝活動を行ない、論文を執筆  
し、「一九〇一年五月には」社会民主党の創立者  
の一人となったが、この政党は直ちに日本政府  
によって結社が禁止された。

「その後一九〇三年十二月横浜出航、翌〇四年一月  
シアトル到着。同年八月ニューヨークからオランダに  
出発して」一九〇四年「八月」、片山は、アムス  
テルダムでの社会主義インターナショナル第  
六回大会で、副議長に選出されたが、この時、  
同時に選ばれたのが、地球規模の労働運動の  
「星」であるゲオルギー・プレハーノフ「一  
八五六〜一九一八」であった。

この大会の終了後、片山は「同〇四年九月に三  
度目の」渡米をし、再び米国でプロパガンダを  
始めるのだが、今度は社会民主主義の活動のほ  
かに、日本文化の宣伝にも努めた。柔術である。  
その或る流派の後継者として、ヒューストンで  
の米国社会党大会では、喜んで柔術のデモンス  
トレーションを行なった。その結果、この護身  
術はすぐにモードとなった。

それに続く十四年間「正しくは十七年間」、こ  
のスポーツ重視型の革命家は或る時は米国で、  
或る時は日本で、或る時は他の国々で、これは

勿論、彼氏に臨時の避難所を提供することに合  
意した国のことだが、そうした国々で生活した  
のである。その後、一九一八年「正しくは一九二  
一年」「同年十一月にメキシコを出発し、米国、フラ  
ンス、ドイツを経由して」、片山は、世界で初めて  
社会主義革命を勝利させた国、即ち、R S F S  
R「ロシアソビエト連邦社会主義共和国」へと、最  
終的な渡航を果たした。

モスクワでの片山潜はすぐに党建設の活動  
に参加し、組織されたばかりのコミンテルン「共  
産主義インターナショナル」に入り、まもなくそこ  
の執行委員会の幹部会会員にさせられた。一九  
二二「大正十一年」年には日本共産党の創立者の一  
人となった。実際には日本共産党は創立の日か  
ら日本政府との過酷な対立の渦中にあつたが、  
片山はそうした現実には話に聞かざりだつた。  
長らくソ連邦を離れずにいて、日本に戻らな  
かつたからである。もつとも帰国するのは余りに  
も危険なことではあつたけれども。

初め片山はストラスナヤ広場にある東洋勤  
労者共産主義大学「クートベ」で学び、その後、  
同校で教えた。祖国の同僚へは、党務に関する  
勧告と、スターリン同志からの熱烈な挨拶とを  
伝えた。そして、高齢化と健康悪化にも拘わら  
ず、格闘技のことを忘れなかつた（或る時は〇  
G P U「ソ連人民会議付置「統合国家保安管理局」」  
の中央クラブに於ても「東洋民族大学の日本人  
学生グループが、防御と攻撃の方法として、真

の日本格闘技、即ち、所謂柔術のデモンスト  
レーションを行なった」）。

以下、当時コミンテルンに勤務しその指導者  
の一人の妻であつたアイノ・クーシネン「一八  
八六〜一九七〇」の回想録から引用しておく。

「日本共産党をモスクワで代表しているのが  
片山潜だつた。善良な老人だが「必要な際に黙  
っている」ことがまるで出来なかつた。二度ほ  
ど特別な任務で国外へ派遣されたが、すぐに、  
片山はこうした秘密の任務には不向きであると  
判明し、彼をモスクワに留めおくことが決定さ  
れた。」

剃刀の刃のような舌鋒を有するこのフィン  
ランド女性が片山について下した「勤務評定  
書」の如き文章を読んでもみると（この女性はそ  
の回想録の中で他者に対して往々にして酷く  
辛辣なのだが）、まるで、漢字が書かれた骨片  
を私が発見した、まさにその精神病院で作成さ  
れた診断書か何かを読んでいる、という錯覚に  
捉われそうになつてくる。とは言え、潜自身が  
精神病院に入院したことはない。

片山は二度、結婚した。「一八九七年十一月の  
横塚フデ（一八七七〜一九〇三）との」最初の結婚  
では娘の安子「一八九九〜一九八八」と息子の幹  
一「かんいち」「一九〇一〜一九三二」を儲けた。  
後者については我々には殆ど知る所がない、こ  
の青年が酒が強かつたという以外は。原という  
姓の女性「原たま」「一八七四〜一九三八」との「一

九〇七年五月の「第二の結婚では娘が授かり、千代子（千代）」「一九〇八〜一九四六」という名が与えられた。そして一九三〇年代の初め「千代の方は一九二九年七月に」、娘たちはソ連邦の父親の元へやって来た。

再び、アイノ・クーシネンの文章から引用する。

「ヘイモ「二八九四〜一九三八」（コミンテルンの勤務員。——引用者註）は或る時、たまたま、片山の部屋にすでに数か月も、片山の娘と称する若い日本人女性が御客として住みついていることを知った。誰だかが片山の個人ファイルを観き見ることを思いついた。片山が未婚であると知れた。ヘイモは友と友としての会談へと片山を招待した。すると潜老人は以下のような説明をした。

『私は妻のことを言及する必要は認めていなかった。何故なら、私は両親の断つての願いで結婚したことがあるが、妻との生活は極く短いもので終わってしまったからだ。娘が生まれたのは私が日本を去った後のことで、今回、日本共産党が親切にも、その娘のために、私の所へ来るための旅費を工面してくれた』

だが、コミンテルンのエージェントが日本で調査してみると、驚いたことに日本共産党は片山の娘のことなど何一つ知ってはいなかった。娘をモスクワへ送ってもいなかった。おまけに、ごく早婚の片山の妻には娘など生れていなかった。

たのである。

コミンテルンにとつて事態は微妙なものとなった。明白なのは、この片山の所にいる女性がコミンテルンの秘密を探り出すために日本の秘密警察によって送り込まれた、ということだ。

しかし、もしコミンテルンが彼女を拘束するならば、GPU「国家保安管理局」はその迂闊さ加減を非難し、監視を強化することだろう。一体どうしたらよいのか。窮余の一策として採られたのが、余り騒ぎ立てずに「娘」を日本へと送り返す、という措置だった。そしてその際、彼女自身にも、片山潜にも、何一つ説明はなかったのである。」

以上、「世界革命の参謀本部」を支配したこの前代未聞のゴタゴタでは、初歩的な人事管理がこの「将校団」に対してさえ為されていないことを裏付けているが、これ以外でもアイノ・クーシネンの回想録が貴重なのは、この最重要の日本人共産主義者の末娘への言及があることだ。いずれにせよ、千代が初めてソ連邦にやって来たのは一九二八年か二九年か「正しくは二九年七月」であり、「その後、日本へ送り返され」又、「ソ連へ」千代は戻ったのである。姉の安子の方は、もつと後になって、父の死「一九三三年十一月五日」のすぐ前の一九三二年「正しくは一九三一年四月」に、モスクワに現われた。一方、千代の診療録「カルテ」には、「千代は」「一九三〇年にソ連へ移住した」と記されていた。

いずれにせよ、片山千代には十分に、あの反戦詩を（何故だか牛の肩胛骨に）書き付ける機会があつたはずである。どうしてその後、病院内のキリスト教聖堂からそれが出て来たのかは、不可思議なのだけれども。そのカルテでは、この日本共産党の創立者の一人の娘について、医学的観点からこう性格付けられている、「生き生きとしていて、人付き合いの良い、陽気な人物である」と。安子と千代の言い分では、その家系では誰一人、精神病を患った者はいなかった。だが、運命は末娘を唯一の悲しき例外とした。その原因として、父親の嵐の如き革命活動が挙げられ得るかもしれない。

すでにソビエトロシアへ渡る以前に潜は妻「たま」と離婚せざるを得なかった「正しくは訪ソ以後の一九二三年三月に岩崎清七、石橋湛山の仲介で形式上、離婚」。このようにして日本の反共主義者の攻撃から彼女を守ろうとしたのだ。彼女は旧姓の「原」を残した。だから、娘の千代はソビエトの公文書では「片山原千代」で通っている。千代は中等教育を受けることが出来、さらにタイプライターの学校を卒業した。しかしどんなに姓を変えても、警察の眼からその出自を隠すことは出来なかった。一九二〇年代の軍国主義の日本では、共産主義者の娘であることは、あんまり有難くない運命だった。「よろしくない」ばかりでなく、致命的に危険なことだったのである。左翼陣営に対する弾圧は年

ごとに過酷さを増大させて、一九三〇年頃には、日本共産党は実際に悉く壊滅させられていた。数千人の党員が下獄させられ、その家族らは、菊の紋章の玉座に対して一枚岩的な愛情を抱く日本社会の中で、卑しめられ辱められる成員となった。

このような心理的な圧迫に耐えることが出来ずに（「権力側からの迫害に晒されて」と公文書では公式化されているが）、千代はモスクワの父の元に駆け付けたのだ、ほとんど知る所のない父だったのではあるが。だが、第一次五ヶ年計画「一九二八〜一九三二」の時代にソビエトの首都でまさにこうした若い女性が生活する、というのは、周知のごとく、「より容易なこと」ではなく、むしろ正反対のことだった。彼女に対しては「日本のスパイではないのか」という嫌疑が働き、事実上、ソ連から密かに日本へと連れ出されたわけだが、突如、又、ソ連に戻って来ても、その嫌疑が晴れることはなかった。彼女はロシア語がわからず、仕事先としてはコミンテルンが当てに出来るだけだった。だが、勤務以外の場では、誰と付き合ったらよいのか。カルテ曰く「生き生きとしていて、人付き合いのよい、陽気な人物」である千代は急速に意気消沈し、「神経質で頑固な」女性へと様変わりしてしまった。出版所のタイピストとして働き、ロシア語を学んでいたが、精神が負荷に耐えない状態が進行し、遂には、持前の頑

固さが今や、無気力・無関心へと交替してしまつた。同じく「一九三二年四月に」モスクワにやつて来た安子とも特に打ち解ける、ということがなかった。この姉は千代よりも九歳も年上であり、父を通してのみ血が繋がっていた。しかもすでに世界の半分をも乗り回して来ていた。この安子の到着後しばらくして彼女らの父は七十歳の境を越え、健康上の異変を感じ出し、恒常的に病院とかサナトリウムで治療を受ける身となった。そして一九三三年十一月「五日」に逝去した。その骨壺は、クレムリンの壁へと、ソビエト国家の指導者らによって運ばれたが、その中にはスターリンも含まれていた。末娘の生活は闇と恐怖の中へと入って行つた。

ソ連で自立して生活する、ということについて千代にはまるで備えがなかった。誰一人、彼女を守ってくれる人がいなかった、同胞「日本人」から、のことだが。モスクワでの日本人デイスポラ「離散日本人社会」は、片山という指導者を失うや、その地位と、同様にコミンテルンからの生活資金とを求める死闘が始まつた。主な、否、実際には唯一の、闘争手段となつたのは、密告、ということだった。それに関連する資料が今後もアーカイブズから見つかるだろうが、今の所はこう仮定しておこう、「真つ先に、片山潜の娘が二人とも誹謗中傷の矢面に立たされたのだ」と。「父の死後」ほとんどすぐの一九三四年、千代に幻聴が始まつた。そして

彼女は初めて精神病院に入った。診断の結果、統合失調症だと判明した。三か月間、集中的な治療が為され、相反的な結果が齎された。即ち、幻聴は消えたけれども、生気とか好奇心、生きる希望とかの最後の残滓も消え去つたのだ。千代は何とか自己をコントロールすべく働き続けた。だが、他の文書によれば、自宅での引き籠もりに精を出したのである。

一九三六年十一月から彼女の状態は悪化し、再入院に至つた。退院はそれから、少なくとも二、三か月経つてからだつた。カルテにはその経過について説明が何もない。他のアーカイブズを探す必要がある。

これは余り明白なことではないが、日本でかあるいはソ連邦で、千代は同郷人と結婚している。相手は東京出身の伊藤政之助と言ひ、竹内という姓でモスクワで生活していた。かなり若い（一九〇八年東京生）伊藤はデイスポラ「離散日本人社会」にとつては重要な職務に就いていた。「ソ連外国労働者出版所」の日本人部の部長だったのである（千代も同じ部のメンバーに数えられる）。出版は重要なプロパガンダの手段であるが、党の創立者「の一人」と伊藤が近親関係にある、ということは、ライバルたちにとつては、事態を危険なレベルに至らしめることだった。日本人の共産主義者の努力は一方向へ集中され、その結果、「一九三六年」十一月二十五日に伊藤は虚偽の告発によつて逮捕さ

れた。罪名は「スパイ」破壊工作員のテロ活動」である。丁度その時、彼の妻「千代」が精神病院に入院する。十か月後、伊藤は銃殺された（直ぐに続けて、彼の敵たちの殆ど全員も処刑された）。こうして、希望の光が全く差さない病院での生活が千代の運命となった。

一九四〇年からは、千代は一人にしておくには危険な状態となった。幻聴が強まり、彼女は自分で自分と話をし始めた。と同時に、多少とも理性的な手紙をコミンテルン指導部に書いた。ダモイ、即ち、自分を日本へ帰らせてほしい、と。だが、その返答としては、治療あるのみであった。治療は良心的なもので、出来る限りのことは為されたのだが、しかし解放はされなかった。

一九四一年五月、片山千代はモスクワ郊外の精神病院に移された。特別隔離病棟などを有する精神病院へ、であった。その病院こそは、それから七十年後に、私が、漢字で埋め尽くされた問題の骨片を見出した、まさにその場所だったのである。

「カルテにはこう書かれている」

「《心理状態について》 明白な意識がある。

自分が誰だか分かっている。意気消沈し、主体性がなく、不活発である。いつも部屋の片隅に同じポーズで坐っている。時々、わけのわからない笑みを浮かべるか、自分で自分と会話をするか、している。自閉症気味で、取っつきにくい。

こちらの質問には「フショー・ハラショー」「万事OK」と答えるばかり。手仕事をするが、これは非生産的なものだ。」

この「手仕事」の中に、骨面への反戦詩の書き入れが含まれていたのか。もちろん、あれが片山千代の筆跡であると仮定しての話ではあるが。

一九四六年一月三十日、日本共産党の創立者「の一人」の娘は、その時にはすでに「生ける屍」と成り果てていたが（「穏やかだが、取っつきにくい。終日、寝床にいて顔を蒲団で蔽っている」）、他の病院へと移送された。少しずつ、もっと遠い所へ。死につつあったのだ。さらに数日、生き抜いた。姉の安子の方は、密告、逮捕、疎開に見舞われたにも拘わらず、一九八八年まで生き通した。モスクワで逝去したが、せめて自分の骨は祖国の日本に埋めてほしいと依頼した。彼女らの父親は全世界の労働者の幸福のために闘争したのだが、自己の勝利を誇ることはできなかったのではないか。我が子の幸福をさえ守れなかったのだから。（了）

訳者付記

【原題】 Стихи на костях.

【初出】 <Литературный Аспект> 2022. 「月刊雑誌『ディレッタント』二〇二二年四月号の「個人アーカイブズ」欄」

【出典】二〇二三年十二月に著者から訳者に送付されたロシア語原稿。

【著者】アレクサンドル・クラノフ。一九七〇年モスクワ生まれのロシアの日本学者。拙訳『東京を愛したスパイたち』（藤原書店、二〇一七年一月刊）の著者。

（二〇二三年一月十六日、攔筆）

